



「倒れるまで党と人民につくす」とした葉剣英氏だったが  
(昨年11月の全人代で—WWP)



東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄

### 葉剣英引退の 政治的背景

対内的には非毛沢東化からさらには「鄧小平整風」へと動き、対外的には中ソ接近・米中冷却化に示される世界戦略の転換を遂げつつある中国の政治的舞台から、軍・政の

最長老、葉剣英・全国人民代表大会常務委員長が引退した。

八六歳という高齢、誰の目にも明らかかな昨今の老弱ぶりを考えれば、当然の道筋ともいえようが、昨年の中国共産党第一二回大会では「倒れるまで党と人民につくす」と語って引退を固辞し、全国人民代表大会の場でも退かなかつた硬骨漢だけに、今回の引退は、やはり無念のいたりである。形のうえでは、去る二月二五日付の葉剣英書簡が全国人民代表大会常務委員会(第二六回会議)で披露され、彭真・副委員長や楊尚昆・副委員長が葉氏の業績をたたえ、労をねぎらっているが、党中央政治局に居坐って、「俺の目の黒いうちは鄧小平の思いどおりにはさせぬぞ」といった調子であったことを想えば、今回の引退は、葉剣英の政治的役割の終焉を物語る以外のなにものでもなからう。そもそも過般の一二回党大

会では、党規約が改正され、党中央書記処の機能が著しく強化された反面、政治局は飾り物のような存在になってしまった。そして、書記処(局)には、胡耀邦・総書記以下、万里、胡啓立といった鄧小平系列の有能な人材が配され、党官僚独裁体制が著しく強化された。このとき、すでに葉剣英の政治的立場は、大きく損なわれたのである。加えて、最近の中国では、非毛沢東化がさらに進み、「毛沢東思想」を唱えた人びとの責任が新たに問われはじめている。今回の全人代常務委員会が毛沢東の故郷、湖南省韶山地区の党指導者で毛沢東一族と見なされる毛迪秋の解任を「汚職」を理由に決定し、全人代代表資格まで取り消したことも、このような傾向を示している。

しかも、毛派と劉・鄧実権派の中間にあった周恩来系列の葉剣英にとって、決定的な問題は、最近の中国で、文革期の周恩来の政治的役割が問い返されつつあり、少なくとも文革初・中期には、劉・鄧実権派を見棄てて毛沢東と文革に賭けた周恩来の立場が大きく損なわれつつあることである。このような周恩来評価の低下現象こそ、葉剣英引退を余儀なくさせた最大の原因ではなからうか。葉剣英のみならず、李先念、谷牧らの周恩来系列の指導者たちは、いま窮地に立たされているといっても過言ではない。

もとより、二月中旬に中国を訪れた横枝・総評代表団に對して、胡耀邦・総書記が、葉氏の後任に彭真氏を推したいと語った旨、報ぜられたにもかかわらず、今回、後任委員長が決まらなかったことは、来るべき国家主席選任問題とも絡んで、党中央に、何らかの問題や思惑があったことを物語っているのかもしれない。葉剣英辞任後の中国内政には、今後とも注意を怠ってはなるべき。